

## 第 105 回日本精神神経学会総会

## 教 育 講 演

## 統合失調症の仮想史

酒 井 明 夫 (岩手医科大学神経精神科)

「統合失調症は 18 世紀以前に存在したのか？」あるいは「統合失調症はいつ頃から存在したのか」という問題についてはとりわけ欧米で議論が展開されてきた。本論では欧米の歴史資料を対象として、1) 任意の文化やモデルからのずれとしての奇異さに注目すること、2) 埋没してしまいがちな陰性症状よりも陽性症状を拾い上げること、3) 当事者の記した資料を重視することなどに注意しながら、西欧古代から 18 世紀まで統合失調症の足跡を探索した。歴史の中でこの病を同定することはきわめて困難であるが、異なる時代と文化の中でこの病が取り得る可能態について検討した。

## 1. はじめに

これまで欧米では、「統合失調症は 18 世紀以前に存在したのか？」というテーマをめぐる活発な議論が展開されてきた。周知のようにこの病の存在が部分的に伝えられるようになったのは 19 世紀に入ってからであり、概念形成がなされたのは 19 世紀末、名称が与えられたのは 20 世紀初めのことである。18 世紀以前にこの病気はなかったとする側の積極的な根拠は、18 世紀以前にその「学術的な」記載が見られないことに加え、本疾患が産業革命以降の社会・環境要因の影響下にあることなどである。

しかしここでわれわれが考えてみなければならないのは、「あった、なかった」の境目とされている 18 世紀という時間的区切りが、精神医学という枠組み自体の成立時期に重なるという事実である。これはひどくやっかいな問題を引き起こす。枠組みのなかった時代には、もし当の病があったとしても枠組みに属する概念で記載されたはずもない。したがって「あった」という主張は本質的に推測に頼る他はなく、確実な論拠を示すことができないのである。一般的に「あった、なかっ

た」という議論は圧倒的に「なかった」という側が不利であるにもかかわらず、対等な議論が行われているのにはこうした事情が少なからず関与しているだろう。逆に「あった」とする側を支えているものは、「統合失調症は本当に 18 世紀以前にはなかったのか？」という疑問であり、証明はできないものの、この病の起源を知りたいという探求心なのかもしれない。今回試みようとするのは、「あった」という推定の下に、歴史的文献のなかに統合失調症の感触を探ることである。

## 2. 方法と限界

まず注意しなければならないのは、今日われわれの知る精神症状や経過が時代や地域の文化的影響を蒙ることである。精神疾患を同定する上で重要な事柄は異なる文化では異なる病態として記述され、異なるモデルでは異なる事象として理解される可能性がある。この困難さを極力緩和する方法論としてここでは、任意の文化やモデルからのずれとしての「奇異さ」に注目することにする。言動や行動上の奇異さは何らかの精神的な問題点とつながっている可能性がある。もちろん奇異さ

自体が統合失調症を直接的に指し示す訳ではないが、その重要な一側面であることは確かである。あくまでも歴史探索のてがかりとしてこの概念を追ってみたい。

資料を検討する上での重みづけは、何よりも当事者の記した資料、とりわけ自叙伝を重視することである。理由は言うまでもなく自らの体験記述が重要であるということと、縦断的な視点を含むということである。

調査の限界としては、まず全体としてそれは先に述べたような理由で確証を得られるものでもなく、史実を証明しようとする歴史家たちの方法論とは本来的に異なるものであり、いわば統合失調症の仮想史としか呼べないものである。また、陽性症状は比較的目にとまりやすいが陰性症状はどうしても埋没してしまいがちだということ、そして、明らかな脳器質疾患の除外という条件がなかなか達成されないことである。

### 3. 古代の記述から

紀元前5世紀、ペルシャ戦争を記したことで有名な歴史家ヘロドトス(485?~425 BC)は、スパルタ王クレオメネスの狂気による自殺に言及している。

「帰国するとすぐに彼(クレオメネス)は狂気にとりつかれた。以前から狂躁の気のあった男ではあったが、道で出会うスパルタ人の誰彼の区別なく、その顔を杖でなぐるのである。彼がこのような振舞いをして発狂したことが判ったので、近親の者たちは彼に木製の足枷をかけて監禁した。監禁されたクレオメネスは、ある時看視人が唯一人で他に人気のないのを見て、短剣を呉れといった。はじめ看視人が渡そうとせぬので、クレオメネスは自分が自由になったらどうするか覚えておれと脅した。その男は国家奴隷の身分の者であったので、その脅迫におびえてとうとう彼に短剣を渡してしまった。クレオメネスは刃物を受け取ると、脛から始めてわれとわが身を切り裂いていったのである。肉を縦に切り裂きながら脛から腿、

腿から臀、脇腹と進み、最後に腹に達するとこれをも縦に切り裂き、このようにして最後を遂げた」(松平千秋訳)<sup>7)</sup>

これをどう解釈するかは、記述の少なさもあって千差万別だろう。クレオメネスの狂気は、原文ではマニア(mania)と記載されているが、これはもちろん今日の用法とは違い、古代ギリシャでは重症の狂気を表す概念として位置づけられていた。以前から兆候が見られていた、もしくは性格的に逸脱していたが、大きな出来事をきっかけとして狂気が発症したという経過である。他にどのような事情があったのかは知るすべもないが、全身の肉を縦に切り裂いていくという異様さはあまり類を見ないものである。ここに、今日でも時に観察される、この病による自殺の特質を見出すこともできるかもしれない。

時代はだいぶ下って、1世紀、今日まで伝わる貴重な医学書を著したケルスス(25 BC~50)は「狂気 insania」を三つに分類している。一つは発熱とともに起こる急性の病で、「ギリシャ人たちがフレネシスと呼んだもの」で、これは現在、身体的原因もしくは身体病で起こってくる「せん妄」ということで精神医学史家たちの意見がほぼ一致している。二番目は「黒胆汁が原因で起こり、最初は熱を伴わないが次第に微熱が出てくる憂鬱な病」で、古代から現代までその名称が引き継がれているメランコリー、すなわち今日のうつ病を中核とする幅広い症候群と考えられる。問題は三番目の病、つまり「経過が一番長引くものの、患者は命を縮めることもなく比較的元気でいられる病」である。これはさらに「幻影に悩まされるもの」、「判断力や理解力が冒されるもの」という二つのサブタイプに分類される<sup>8)</sup>。

これも記述が不十分なために判断に窮する。しかしケルススの定評ある観察眼を信用すれば、三番目の疾患は、身体病に伴う症状精神病的なものとうつ病を中核とするさまざまな病態を除いた何ものかということになる。それは慢性に経過してあるものは幻覚を伴い、あるものは判断力を失っ

ていくとすれば、そこに統合失調症の亜型分類すら想定できるかもしれない。

現在のトルコの一地方エフェソスのルフス（2世紀）は、メランコリーの症候を解説している。

「（メランコリーの患者たちの）主たる徴候とは恐怖と疑念、そして、ある一つものに関する誤った考え（*cogitatio falsa*）である。ある者は蛇やそれに類するものを飲み込んでしまったと思い込む。何も危険のないところに危険を感じ取り、何も利益のないところに利益を見出そうとし、親しい人々に対して恐れを抱き、また、世の人々すべてに恐れを抱く者もある。土の壺になったと思ひ込む者、皮膚が乾燥して羊皮紙のようになってしまったと思ひ込む者、自分の頭がないと考える者もある」<sup>11)</sup>

先のケルススの記述では、メランコリーを除いた範疇に注目したが、既に述べてきたように古代におけるメランコリーというのは非常に幅広い概念である。それは狼憑きのような異様な病態も含み、ある種の性格特徴をも表していた。さらに、古代においても疾病分類は一樣ではなく、著者によって大きく異なる場合も少なくない。したがって「メランコリー」の中にわれわれが探索している病が隠れている可能性もまた十分にあるわけである。上記の引用のなかで興味深いのは、われわれの教科書にも登場する妄想の定義「誤った考え」である。いくつか具体例が挙げられているが、その中には非常に奇異な内容も見出すことができる。

ルフスと同様、2世紀に生きたカッパドキアのアレタイオスは医学史上、初めて双極性障害を記載した人物として知られている。彼もルフスのそれと類似の「誤った考え」やそれに基づく行動を記載している。

メランコリーの患者たちについて：「彼らは、毒を盛られるのではないかと疑い、人を嫌って砂漠に逃げ出し、迷信深くなり、生きることを厭

う」。

マニアの患者たちの空想について：「彼らはまた、途方もない空想にとらわれる……ある者は水を飲もうとしないが、それは、自分がレンガであると思ひ込んでいて、液体によって溶けてしまうことを恐れるが故なのである」<sup>11)</sup>

興味深いのは、アレタイオスが区別するメランコリーとマニア双方に同様の否定的トーンに彩られた「誤った考え」が現れていることである。ヘロドトスの箇所でもマニアの位置づけについて述べたが、われわれはもちろん、マニアの中にも統合失調症の影を追っていくべきなのだろう。

#### 4. 中世の脈絡について

周知のように、中世における狂気は宗教的脈絡で語られることが少なくない。この時代にももちろん医学的モデルは存在した。しかしキリスト教が社会を覆っていた中世では、宗教的モデルの力が相対的に大きかった、もしくは医学的モデルと宗教的モデルの混淆が起こっていたと言える。Murray, A. は1248年にフィレンツェで起こった出来事を紹介している。それによると、ミンガルダという名の少女が悪魔に苦しめられ、その悪魔は彼女の口を借りて汚い言葉を使い、さらに彼女を駆り立ててアルノ川に飛び込ませて殺そうとした。しかし彼女はフミリアナの墓所に連れて行かれた後、回復した<sup>10)</sup>。中世全体を通じて、これに類似の事例は枚挙にいとまがない。悪魔憑きの症例を医学的モデルで捉えられるとすれば、そこには多種多様な疾患が想定できるに違いない。

つぎに紹介するのは最近になって発見された貴重な資料である。注目すべき点は二つある。まずそれが現存する中では非常に珍しい、市井の女性の自叙伝であったこと、もう一つは、本書の冒頭につきのような文章が載せられていたことである。

「子供を出産した後もはや生きられないと覚悟した私は、前にも述べたように、自分の全生涯について赦しを得ようと聴罪司祭を呼んだ。ところ

が、話が長い間隠し通してきた事柄にさしかかったとき、聴聞僧は気ぜわしげに私を非難し始めた。私は言いたいことを十分に言えず、その後僧が手を変え品を変え促しても、もはや何も話す気がなくなってしまった。一方に地獄の恐怖、他方に僧の糾弾という状況の中で、私は完全に正気を失い、半年と8週間、そしてさらに何日かの間、悪霊による錯乱と苦悩のうちに置かれた」<sup>8)</sup>

すなわち本書は、精神に問題を抱えた女性が自分の体験を赤裸々に語った希有な記録だったのである。女性の名はマージョリー・ケンブ(1373~1440)と言い、字が書けなかったために僧職者に口述筆記させたことがわかっている。記述はさらに続く。

「この間私は、昼夜を問わず悪魔たちが炎の燃えさかる口を大きく開いて自分を飲み込もうとしたり、迫ってきたり、脅しつけようとしたり、引き寄せようとしたりするのを見たと思い込んだ。悪魔たちは私を呼びつけて脅し、キリストへの信仰を捨てること、神と聖母、天国の聖人たち、善き行いや美德のすべて、父や母、すべての友を否定するように命じた。私はそれを拒めず、夫や友人たち、そして私自身さえも誹謗中傷した。悪霊たちの薦めに応じておぞましい非難の言葉を撒き散らし、徳や善には見向きもせず、ひたすら邪悪さを求めた。悪霊たちの誘いに乗って何度も自殺を試み、彼らもろとも地獄で破滅するところだった。その証拠に私は自分の手に噛みつき、一生消えないほどの傷跡が残ったのである。他に何の道具も持たないために自分の爪で心臓に近い箇所を引き裂いた私は、もし四六時中拘束されていなければ、さらに恐ろしい行為に走っていたに違いない」<sup>8)</sup>

この部分だけを見れば、Windeatt, B.A.<sup>15)</sup>の言うように、通常の産後うつ病 postnatal depression などよりもずっと重篤な、ときにはせん妄を含む産褥期精神病 postpartum psychosis

という診断が妥当とされるかもしれない。しかし、本書全体を通じて出現する彼女の病態はきわめて複雑である。産後のエピソードから回復した後も、自分の名前を呼ぶ声や天上の妙なる調べなどが聞こえ、主にキリスト、聖母マリア、その両者、または父なる神や聖人たちとの内なる対話も経験し、自分のことが話される、虐待されているという思いを抱き、瞑想体験時には色彩や立体音響を伴う場面幻覚も現れた<sup>5,6)</sup>。また、マージョリーは感情の起伏が激しく、精神が高揚したり罪の意識にさいなまれたりすると、髪をかきむしる、大量の涙を流す、身もだえしながら床の上をころげまわる、肉体に鞭打つといった異様な発作を起こした。これらを踏まえた上で Furlong, M. はマージョリーを端的に妄想型統合失調症 (paranoid schizophrenia) と「診断」している<sup>5)</sup>。

ジャンヌ・ダルクの活躍とその最期は歴史上もっとも有名なものの一つである。彼女を襲った宗教裁判という悲劇は目を覆いたくなるものだが、しかしそれは精神医学史的にはきわめて重要な資料を提供する。というのも審理経過が日を追って克明に記録され、ジャンヌが言ったとされる言葉をわれわれに伝えているからである。

1431年2月22日に行われた第2回審理で彼女は以下のような内容を述べたとされている。

「同女が十三歳の時、行いを正すよう汝を助けようという神の声を聴いた。最初は非常に恐ろしく感じた。この声は真夏の正午頃、父の庭で聞こえた。……この声は右の方、教会の方角から聞こえてきた。声が聞こえる時は殆ど例外なく光が見えた。この光は声が聞こえてくると同じ方角にあり、大程は沢山の光だった」(高山一彦訳)<sup>13)</sup>

そして同じ第2回審理において、彼女は毎日そうした声を聞いていたこと、自分にはそれが必要だったと述べたことが記されている。彼女の体験は宗教的モデルでは奇跡か悪魔の仕業、一方医学的モデルでは幻聴と幻視を伴う精神病的状态とされるかもしれない。19世紀の精神医学者 Cal-

meil, L.-F. (1798～1895) は「ジャンヌは神的狂気 *théomanie* を煩っていた」<sup>3)</sup>と結論づけている。

## 5. 近代以降

近代初期の資料で興味を引かれるのはアンドレアス・ラウレンティウス (1560?～1609) の著作である。特徴は奇妙な病態が数々記録されているだけでなく、奇妙な治療もまた数多く紹介されていることである。その中の一つを引用する。

「私は、書齋の中で奇妙な想像にとらわれた若い学者の話を読んだことがある。彼は、自分の鼻が大きく長くなってしまったと思い込み、何かにぶつかって鼻がつぶれることを恐れて動けなくなってしまった。そして、忠告されたり説得されればされるほど、自分の思い込みを強くしていったのである。そんななか、ついに一人の医師が、ひそかに大きな肉の塊を持って彼の元を訪れ、この大きな鼻を取り去っていくことによって自分が彼を治癒へと導くと宣言した。そして自分の持ってきた肉塊を少量ずつもぎ取っていくことにより、医師はこの若者に鼻が取り去られたことを信じさせたのである」<sup>9)</sup>

自らの身体に関する妄想と仕掛けを用いた特異な精神療法ということだろうか。もしこれが統合失調症の妄想だとすれば、このような手段で簡単に解消できるというのは一見あり得ないように思える。しかし、「妄想」の内容それ自体は十分に奇異である。

貴重な自叙伝の例をもう一つ挙げてみる。イギリス人牧師ジョージ・トゥロックス (1631～1713) の自叙伝は 1692/3 年に書き上げられ、本人の遺言によって死の直後、1714 年に出版された。内容は彼のいわゆる「病跡」に満ちているが、その中につきのような一節がある。

「しかし、ベッドにしばらく横たわっていると、悪魔の力によって、何も見ず、何もしゃべらないようにさせられた。そして数日間、この指図に従

って私は目を開けることもなく、口を開くこともなかった。……昼も夜もベッドに横たわり、その間私は、壁の中にいる妖精たちの声や話を聞いたような気がした」<sup>14)</sup>

彼の社会的位置づけもあって宗教的脈絡での体験として語られているが、医学的モデルで解釈することも可能である。その場合、させられ体験や昏迷、そして言語幻聴が抽出されるかもしれない。本書を編纂した Brink, A.W. は「トゥロックスの病はその当時、おそらく宗教的メランコリーとして記述されたであろう」<sup>2)</sup>と述べているが、今日的には統合失調症の可能性を否定できないだろう。

最後に検討したいのはベンジャミン・ラッシュ (1745～1813) の記述である。

「たとえばある患者は自分の身体の中に生きている動物がいると信じている。以前この町にいたある船長は、長年、自分の肝臓の中に狼がいると信じ込んでいた。……輪廻転生によって仲間の魂を受け継いでいると思込む患者もいるが、より多いのは動物の魂を受け継いでいると信じ込むことである。ペンシルヴァニア病院にいた狂人は、自分がもと子牛だったと信じ、自分を殺した肉屋の名前や、今の自分の身体を動かしている肉が以前売られたフィラデルフィアの市場の場所について語った。……植物になったと思込む者もいる。……ブルボン家の王子の一人は、しばしば自分の庭に出かけて行ってそこに立ち、まわりの植物すべてとともに、自分にも水をやるよう要求したのである。……イングランドのある政府高官は、自分が、襲ってきたおいほぎを絞め殺してしまったために、その罰として神が自分の魂を破滅させてしまったと信じていた。しかし、それ以外のことについては、彼の精神はきわめて正常だったのである」<sup>12)</sup>

2 世紀にルフスが記した「誤った考え (*cogitatio falsa*)」の系譜が感じ取れる。実際にこの種の誤った考えの例示は長期にわたって繰り

返され、その都度新たな自験例がつけ加えられていったということもあり、こうしたいわば妄想主題の一貫性は、それを中核とする疾患単位の存在を想定させる。ラッシュの挙げている事例それ自体に関しては、妄想か体感幻覚かが不明な体験、前世に関する非現実的な妄想、植物への変身妄想、被害妄想などが読み取れるかもしれない。最後に挙げられている症例は深刻な内容の妄想こそあるが、それ以外は正常とされている点でいわゆるパラノイアもしくは妄想性障害を彷彿とさせる。

これまで概観してきた事例を総括するのは容易ではない。記されている内容という点でも、記載の量という点でも、体験を語っている主体という点でも多種多様である。したがってわれわれは「統合失調症らしさ」について多種多様な段階を目の当たりにしたということになるだろう。今回の試みはややもすれば不統一な多種多様性の中に拡散してしまうように見える。しかし可能態として興味深いことは残されている。記述が属する時代精神や文化的脈絡も多種多様である以上、もし今まで見てきた事例のいくつかが統合失調症であるとすれば、それが時間軸と文化軸で構成される空間の中でどのような様態を取り得るのか、どのような表現型を持ち得るのかをわれわれは目にしてきたことになるのである。

#### 文 献

- 1) Aretaeus of Cappadocia : Aretaeus, the Cappadocian (ed., trans. by Adams, F.). Sydenham Society, London, 1856
- 2) Brink, A.W.: Introduction. The Life of the Reverend (ed. by Brink, A. W.). McGill-Queen's University Press, Montreal, p.1-38, 1974
- 3) Calmeil, L.-F.: De la Folie : Considérée sous le Point de Vue Pathologique, Philosophique, Historique et Judiciaire. J.-B. Baillière, Paris, 1845 [reprint edition, 1976 by Arno Press, New York].
- 4) Celsus: De Medicina I (trans. by Spencer, W. G.). Harvard University Press, Cambridge, Massachusetts, 1971
- 5) Furlong, M.: Visions & Longings: Medieval Women Mystics. Shambhala, Boston, 1997
- 6) Goodman, A.: Margery Kempe and Her World. Person Education Limited, London, 2002
- 7) Herodotus: Historiae [松平千秋訳: 歴史(中)]. 岩波書店, 東京, 2000]
- 8) Kempe, M.: The Book of Margery Kempe (trans. by Windeatt, B. A.). Penguin Books, London, 1994
- 9) Laurentius, M. A.: A Discourse of the Preservation of the Sight: of Melancholike Diseases; of Rheumes, and of Old Age (trans. by Surphlet, R.). The Shakespeare Association, London, 1938
- 10) Murray, A.: Suicide in the Middle Ages: Volume I: The Violent against Themselves. Oxford University Press, Oxford, 1998
- 11) Rufus D'Éphèse: Œuvres de Rufus D'Éphèse (traduit par Daremberg, Ch. et Ruelle, Ch.É.). A L'Imprimerie Nationale, Paris, 1879
- 12) Rush, B.: Medical Inquiries and Observations, upon the Diseases of the Mind. Kinber & Richardson, Philadelphia, 1812 [reprinted, The Classics of Psychiatry & Behavioral Sciences Library, Birmingham, Alabama, 1988]
- 13) 高山一彦編・訳: ジャンヌ・ダルク処刑裁判. 現代思潮社, 東京, 1971
- 14) Trosse, G.: The Life of the Reverend (ed. by Brink, A. W.). McGill-Queen's University Press, Montreal, 1974
- 15) Windeatt, B. A.: Introduction. The Book of Margery Kempe (trans. by Windeatt, B. A.). Penguin Books, London, 1994